議員リレーエッセー 05

一人では何もできないが一人でも始めていこう

千葉県香取市議会議員
河野節子

住民本位の政治を目指して出馬を決意

「4年前の選挙でトップ当選という栄誉をいただき、皆さんの期待に応えるべく市民目線を大事に是々非々の姿勢を貫いてまいりました。また、私の原点は、感謝と奉仕の心を培うボランテイア活動です。その原点を忘れないためにも、毎朝のゴミ拾いを続け、登校時の子供たちの見守りと挨拶運動を続けてまいりました」

昨年12月の選挙戦での第一声はこの挨拶から始まった。選挙カーに乗って要所要所で自らの信条と政策を訴える私の選挙スタイルは、初出馬以来変わらない。

私が初めて旧小見川町の議会選挙に立候補したのは、平成7年、阪神大震災やサリン事件のあった年の統一地方選挙だった。

それまでは町議をしていた夫を支える側で、まさか自分が出ることになるとは思ってもいなかったのだが、4期目に入った夫が慢心して初心を忘れ挫折。私にボランテイア活動を奨励してくれ、「あなたならできるから頑張れ」と常に私を励ましてくれた人生の師の力強い後押しで、夫に代わり町議に出馬することを決意した。

そして、やるだけやって落ちてもいいからマイク一本で自らの信条を訴え、古い田舎の選挙に立ち向かおうという気待ちになり、「町民参加の政治を推進する会」という休眠状態の会を再度立ち上げた。幸い、「出たい人より出したい人を」という信念を持った知人が会長を引き受けてくれたが、私の両親は私の出馬に大反対。私の行く先々に何とかやめさせてくれるように頼んで歩く始末だったが、考え抜いた末に決めた私の決意は変わらず選挙戦に突入した。

私にはお金もなければ時間もない。選挙活動も6時で終わり塾の子供たちを見なければならなかったが、小見川町では30年ぶりとなる女性議員として24人中17位で当選することができた。

思い起こせば当初、私の出馬に大反対していた今は亡き父が、当選後すぐに持ってきてくれた新聞記事の切り抜き。それが市川房枝記念会主催の議員の勉強会だった。そして私と同じ方法で選挙戦を戦ってきた女性議員の皆さんとの出会いは、田舎町の古い風習の議会に一人乗り込んだ私に大きな勇気を与えてくれた。

当時より、「町民の町民による町民のための政治」を目指して、議会をガラス張りにすることを公約に会報の発行、町民との懇談会など、日常活動の大切さを身をもって実践してきた。

政治に対する住民の無関心さを嘆く前に、私はまずもって政治に携わる人間が信頼を取り戻すべきと考え、住民本位のぶれない姿勢を貫いてきたつもりである。その甲斐あって選挙の度に票数が上積みされ、現在に至っている。

住民とともに病院の存続を勝ち取る

私にとって楽しく、やりがいのあることは、市民とともに成し遂げた事業だ。

その一つが、合併後香取市になって消滅の危機にあった旧小見川総合病院の存続と建て替えを実現したことである。

当時、銚子市立病院の突如閉鎖という事態が身近に発生し、地方の医療崩壊が叫ばれていたこともあり、住民の不安が増していたにもかかわらず、合併後、前市長は老朽化した病院建て替えには反対し、19床のクリニックにする案を提示した。

しかし、住民の多くは身近にある小見川総合病院だけは何とか維持しなければとの思いが強かったため、私は前面に出ずに、住民の中から意識の高い仲間に声をかけ、「小見川総合病院の存続と建て替えを推進する会」を立ち上げてもらった。彼らの自主的な動きは、勉強会をはじめ、伊関友伸教授を招いての講演会、先生から紹介された下呂市の金山病院や県立下呂温泉病院の視察研修（私や病院関係者も同行）、そして、2万人を超える署名活動とまさに市民の市民による市民のための運動であった。

病院建て替えに尽力した市民の皆さんらと県立下呂温泉病院前で。平成27年7月7日

会のメンバーは何度も市長に陳情し、議会にも請願していたが、平成25年12月議会での私の一般質問に対する答弁でも、前市長は19床のクリニック案を主張。しかし、翌年の市長選挙で病院の建て替え問題が争点になるや急遽存続をすると訴え再当選した。

その後、病院建て替えに対しての検討委員会が発足し、「推進する会」からも代表が参加し、規模は100床に縮小されたが、総合病院としての機能を保持する医療センターとして令和元年9月に開院の運びとなった。

高齢化甚だしい地方にとって、身近にある病院の存在は住民の安心に繋がり、大変喜ばれている。医療の充実は、住民の最大関心事でもあり、また、その地域の安心、安全を叶えるためにも自治体としては一番力を入れなければならない問題である。

全員参加の特別委員会設置に成功、看護学校の閉校を阻止

もう一つ特記すべきことは、議員全員参加の特別委員会を立ち上げ会派を超えて議論ができたこと。

令和3年、コロナ感染症が蔓延を始めた頃、全国的に医療体制の充実が求められ、看護師不足が騒がれていたが、9月定例議会の最終日に突然前市長から「おみがわ医療センター付属の看護専門学校を閉校したい」旨の報告がなされた。

議会としては寝耳に水。そこで私は、議会での調査研究するため特別委員会を立ち上げることを提案した。会派を超えて過半数の議員での発議案を提出し、前例のない全員参加の特別委員会を立ち上げることができた。

それまでできなかった議員間での議論を議員個人が自分の意見を述べ合ったり、さらに議員有志で現場の看護学校に出向いて実際に大規模改修が必要かどうかを確認したり、現場の先生方の話を聞いたりできた。

また同時に、看護学校卒業生を中心に4500名を超える市民の署名による看護学校存続を求める請願も出され、特別委員会としても市長に対し、「閉校手続きの延期」を求めたので、翌年5月、前市長は閉校の撤回を決定した。香取市議会始まって以来初となる全員参加の特別委員会は、議員間討議の大切さを知らしめたと思う。

22人の議員の中にたった一人の女性議員だが、市川房枝記念会や記念会に参加した議員有志で作る全国自治体議員行財政自主研究会のメンバーとの交流は、私にとって非常に心強いきずなとなっており、男性議員にも一目置かれる存在になってきたと自負している。しかし、女性の声をもっと市政に反映するためにも、女性の候補者養成を今後の課題としていきたい。